

向金蘆

九月号



平成26年9月発行 第43号

白金葭定例句会案内 (*は吟行句会)

十月十七日(金)

12:00～15:00

(アビスタ第三学習室)

兼題・体育の日、無患子

むくろじ

*十月三十一日(金)

10:00～17:00

本郷吟行句会(別案内状)

(文京シビックセンター地下一階学習室)

十一月二十一日(金)

12:00～15:00

アビスタ第五学習室

兼題・蒟蒻掘る、木の葉髪

十一月十九日(金)

12:00～15:00

ア第五学習室

兼題・神楽、都鳥

体育の日、無患子の参考句(10月17日分)

老猫の部屋逃げ回る体育の日

気を付けて体育の日の手を挙げる

体育の日の固過ぎるジャムの蓋

無患子の木未透して空の青

無患子や母と遊びし手の湿り

無患子てふ木の実拾へり良き名なり

無患子の降れるを見つめ道祖神

無患子のたわわの実より空開く

無患子の弥山嵐に吹き騒ぐ

正木節子
谷山花猿
三木基史
辻川時夫
小林有希

擦り切れて夏惜しみをりきりぎりす

浴槽の捨ててありしが竹の春

宵闇のまな板に鳥賊置きにけり

秋燕の惑ひてをりぬ皿の上

鯉ゆるく水疲れして夏終る

増田陽一

光成高志

月例句会報(14/9/19 8名欠3名
宵闇、竹の春)

飯田孝三

阿波野青畝

宵闇の糀殻焼く火燃えあがる
竹山に代々住んで竹の春
白鷺の百羽を連れて稻刈機

宵闇や航空灯の過ぎゆくも
捧げされ山車轡みそなはす神輿さま

光
みち

秋雨に暮る新宿音の街
宵闇や発車のベルのけたたまし
秋茄子きのふと違ふ皿に盛る
若者ゆく去来の墓へ竹の春
宵闇や足元灯す湯壺まで

松村幸一

白桃のマニキュアの手に洗はるる
稻刈りて夜は祭りの煮炊きかな

筒井筒の恋は古りにし竹の春
妻病みて子供に戻る雁の空
深秋を思ひ見舞はねばと思ふ
退院のもうなき妻の夜長かな
宵闇を来し眩しさの机かな

浅野正美

孫が描く吾が顔ゆがむ敬老日
片言の果てしなき子と竹の春
宵闇に帰らぬ人を思ひをり
宵闇に靴音消へてしまひけり
銀木犀香りに引かれ後戻り

青木啓泰

竹の春芋錢旧居の硯箱
宵闇や竹のさやぎに人送る
花槿豆腐片手の立ち話
ひぐらしや酢の香ただよふ夕厨
山の湯に首までつかり法師蟬

倉田紀子

かつぱ碑にさやぐ百幹竹の春
宵闇やよいさよいさと神輿揉む
目玉焼にももいろの塩秋澄めり

宵の闇厩舎平らに馬眠る
がまづみも活けて厩舎の月見かな
竹の春光源氏が来る気配

つくつくや最後あがきを言つて止む

歴史書に少し嘘あり青葡萄

武者昭七

宵闇や足の急かるる無縁坂

里山を蔽ひ尽くして竹の春

車椅子寄せて見上げる百日紅

雨晴れて虹天空をまたぎけり

マンションの窓に灯一つ良夜かな

喫茶店西の店前竹の春

下町は宵闇朝迄つづくなり

庭にあるすすき漸く穂が出たり

小さき柿漸く食べ頃二つ三つ

白粉花おしろいの群れて咲くなり人に触れ

小山陽也

秋茄子きのふと違ふ皿に盛る

歴史書に少し嘘りあり青葡萄

白鷺の百羽を連れて稻刈機

白桃のマニキュアの手に洗はるる

若者ゆく去来の墓へ竹の春

宵闇や足元灯す湯壺まで

宵闇のまな板に鳥賊置きにけり

妻病みて子供に戻る雁の空

宵闇やよいさよいさと神輿揉む

片言の果てしなき子と竹の春

宵の闇廄舍平らに馬眠る

宵闇や歩行あしの急かるる無縁坂

宵闇や足の急かるる無縁坂

手土産に羽二重団子竹の春

孫が描く吾が顔ゆがむ敬老日

かつぱ碑にさやぐ百幹竹の春

浴槽の捨ててありしが竹の春

里山を蔽ひ尽くして竹の春

宵闇や発車のベルのけたたまし

宵闇や竹のさやぎに人送る

深秋を思ひ見舞はねばと思ふ

選句結果 (数字は入選数 左添書きは添削句)

4 竹の春芋 錢旧居の硯箱
3 竹山に代々住んで竹の春
3 花槿 豆腐片手の立ち話

多美子
高志
多美子

1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 3 3

秋茄子きのふと違ふ皿に盛る
歴史書に少し嘘りあり青葡萄
白鷺の百羽を連れて稻刈機
白桃のマニキュアの手に洗はるる
若者ゆく去来の墓へ竹の春
宵闇や足元灯す湯壺まで
宵闇のまな板に鳥賊置きにけり
妻病みて子供に戻る雁の空
宵闇やよいさよいさと神輿揉む
片言の果てしなき子と竹の春
宵の闇廄舍平らに馬眠る
宵闇や歩行あしの急かるる無縁坂
宵闇や足の急かるる無縁坂
手土産に羽二重団子竹の春
孫が描く吾が顔ゆがむ敬老日
かつぱ碑にさやぐ百幹竹の春
浴槽の捨ててありしが竹の春
里山を蔽ひ尽くして竹の春
宵闇や発車のベルのけたたまし
宵闇や竹のさやぎに人送る
深秋を思ひ見舞はねばと思ふ

多美子
幸一
多美子
みち
昭七
昭一
陽一
紀子
正美
孝三
正美
紀子
陽一
紀子
正美
昭七
幸一
みち
みち
啓泰
陽一
幸一
紀子
正美
啓泰
陽一
幸一
みち
啓泰

宵闇に帰らぬ人を思ひおり
宵闇に帰らぬ人を思ひをり
鶏頭の丈に日当る子規忌かな
宵闇に靴音消えてしまひけり
宵闇に靴音消へてしまひけり
退院のもうなき妻の夜長かな
ひぐらしや醉の香ただよふ夕厨
宵闇のぼぼと灯の入る塔の形
がまづみも活けて廄舎の月見かな
銀木犀香りに引かれ後戻り
山の湯に首までつかり法師蟬
鯉ゆるく水疲れして夏終る
大満月たしかに兎餅を搗く
白粉花群れて咲くとて人にふれ
白粉花おしあひの群れて咲くなり人に触れ
稻刈りて夜は祭りの煮焼きかな
雨晴れて虹天空をまたぎけり
喫茶店西の店前竹の春
宵闇を来し眩しさの机かな
車椅子寄せて見上げてる百日紅
車椅子寄せて見上げる百日紅
下町は宵闇朝迄づくなり
つくつくや最後あがきを言つて止む

孝三 正美 幸一 多美子 紀子 昭七 陽也 幸一 昭七
正美 啓泰 孝三 孝三 陽也 孝三 陽也

秋燕の惑ひてをりぬ皿の上
捧げされ山車鸞みそなはす神輿さま
目玉焼にももいろの塩秋澄めり
マンションの窓に灯一つ良夜かな
宵闇の糲殻焼く火ちよろりちよろり
宵闇の糲殻焼く火燃えあがる
名月やや背す屈む菩薩佛
名月ややに背す屈む觀世音
庭にあるすすき漸く穂が出たり
竹の春光源氏が来る気配
小さき柿漸く食べ頃二つ三つ
擦り切れて夏惜しみをりきりぎりす
秋雨に暮るる新宿音の街
筒井筒の恋は古りにし竹の春

一句鑑賞

宵闇や足の急かるる無縁坂
無縁坂とは、東大医学部
に向かつて下るひとつそりと
の中の一節に「岡田の日々
いた。寂しい無縁坂を降り
水の流れ込む不忍の池の北
つく。」とあるその無縁坂で

陽一 高志 紀子 昭七 高志
孝三 陽也 啓泰 陽也 陽一
幸一 みち 幸一 みち 幸一
昭七 光成 高志 上野 不忍池 鷗外の雁
の「無縁坂」の山をぶらがが極まつて
黒のような

という歌にも出てくる。「忍ぶ不忍無縁坂」と作詞している。その無縁坂を足が急かされるように降りてゆく。月の出の遅くなつた宵闇に。宵闇の闇は六道の闇に通ずる怖さがある。そこまで連想するのは勇み足かも知れぬが、そこまで自動的に連想させる宵闇と無縁坂の響き合いがある。半月が出たあと無縁坂はどうであろうか。

竹の春芋銭旧居の硯箱

多美子

牛久市の牛久城址に小川芋銭旧居が残されている。雲魚亭という。そこを訪ねた作者は中に河童を描いたであろう硯箱が展示してあつたことに感興を覚えて、竹の春と取り合はされた。入口付近に「改善一步」と刻んだ道標が立つていて、その後ろには孟宗竹の竹藪があり、青々とした竹の春の記憶が甦つたのだ。

正美

片言の果てしなき子と竹の春

この句を読んで私は直ぐ思い出した。以前見た幼児の記憶と大阪で聞いた話をである。一歳になるかならないかの幼児が歩いてきて、自動販売機の前で、しきりに何か喋つていて見えた。口が頻りに動いているが、言葉にはなつていな。母親が近づいて来て、何を言つているか、私もわからないのよと私に言つた。非常に活発に動く子が良く舌を繰つている様を見た。言葉より行動が先にあって言葉が後からついてくるのではなかろうか。知的発達は言葉によつて出来るのか行動によつて出

宵闇や発車のベルのけたたまし

みち

向いのホームの発車ベルがじりじりじりとけたたましく鳴る。考え事をしながら電車を待つていた作者の心理が「けたたまし」と感じたのである。宵闇の空気を二分するような突然のベル音であつたのだ。宵闇が心を敏感にしているのである。現在は発車ベルがうるさいと言ふ人もあるので、発車メロディに変つたとか。

宵闇やよいさよと神輿揉む

紀子

紀子さんによると、布佐の秋祭りの句であるとか。私も何回もこの祭りを取材したことがある。その通りと合点して○をつけた。「揉む」は重疊の感があつてややうるさいという選評もあつたが、浅草の三社祭の神輿にも通じるので、これでいいと思います。掛け声は祭りによつて違うけれども、掲句の場合には宵闇の *yoi* 音が三音となり神輿を担ぐ若衆の勢いに反響していると思います。宵

闇をものともしない祭りの賑やかさ・提灯の中、天空を見上げた宵闇の感慨が思われます。神輿が神社に納まる頃には弦月があがっていることでしょう。

宵闇のまな板に鳥賊置きにけり

陽一

外の宵闇とまな板に置かれた鳥賊、いやに生々しいではないか。「置きにけり」と過去の詠嘆と取れるように書いてあるので、余計に宵闇とまな板の鳥賊が響き合う。何故というに、鳥賊は夜行性であり、暗いところが好きなのに、透明電球を沢山吊つた眩しいまでに明るい船に来られたのではたまたものでなく、明りを避けて船の影に集まつたところを引っ掛けられて水揚げされてしまう。宵闇の闇に帰りたいなあとと思うも、まな板の鯉同然に断末魔を待つてゐるなんて。人間さまと鳥賊とはなんとかなしい関係なんだ。嗚呼あはれ。

一句鑑賞

竹山に代々住んで竹の春

高志

里山の懷に点在する家々が大小の竹山・竹藪に囲まれる。「竹取物語」や「舌切り雀」を生んだ日本の原風景人々の心の古里である。そこから七夕や竹馬の竹を切り出し、その竹で水鉄砲や竹とんぼを作つてあそんだりもしただろう。眼前、親竹も若竹も青々と繁り秋の日に波打つ。「代々」が眼目。父祖の地の篠のさやぎと身内をめ

飯田孝三

片言の果てしなき子と竹の春

正美

片言はたどたどしい言葉、その言葉づかい。元来、児言葉をいうだろう。こどもは、ある時期、意味不明瞭なことばでさかんに話しかける。母親だけが分かるいや、分からぬこともある。それがある日、突然、ちゃんと話しだすのである。竹は春、夏の繁殖期を過ぎ、秋には若竹、親竹とも青々と枝葉を繁らせる。まこと「竹の春」である。子の成長ぶりと季のこころが通い合い、

ぐる血とが響き交うのだ。かつては市街地を外れると見かけた景色だつたが、今では珍しい。他方、地方では荒廃が進む。それだけに、いい尽せぬ懐かしさがある。

宵闇の発車のベルのけたたまし

みち

名月の後は、日ごと月の出が遅くなる。宵のうちの月のない暗闇が「宵闇」。暗いホームに突然、発車のベルが鳴り響くのである。「けたたまし」がすばり。その場の響きが耳元で高鳴るではないか。昼を斯く大都会の駅ではなく、星を戴く駅ホームだろうか。宵闇といえど近世以後は、「君恋し」、「人恋し」、「灯ともしころ」、そんな気分を、突如、発車ベルが吹つ飛ばす。思わず身動きする。その辺の俳諧の妙がさわり。別句「若者ゆく去來の墓へ竹の春」、古びた小さな墓と元気な若者との対照が妙。ゝ墓「へ」が若者の足並みを目に見せ、竹林のそよぎが映える。

k、ち音とA音を繰り返すリズムも爽やかで明るい。

花木槿豆腐片手の立ち話

多美子

木槿の花の下で、その垣根沿いでもいい、主婦が豆腐を片手に立ち話をしている。夕餉支度前のひと時である。この頃は主夫ばかりだが、それでは絵にならない。主婦は二三人がいい。昭和の一頃を思い出させる光景である。

「片手「の」がうま、臍である。目の当たりの情景に片手に豆腐を提げた婦人たちを浮き彫りにする。これが「に」だつたら説明、平板。

白桃のマニキュアの手に洗はるる

紀子

マニキュアは、云わざもがな紅ルージュ。近頃は、その多彩ぶりがもてはやされるようだが、それではない。まるまる産毛透く白桃が、爪紅の指先で水玉を弾く。馥郁、澁刺にして艶。別句「かつぱ碑にさやぐ百幹竹の春」の「かつぱ」は、芋錢の河童。奇怪な面貌と竹箪のさやぎが妙に通い合い、爽快な調べが巧まぬ俳諧を漂わせ、「竹の春」の生気がめでたい。(荊妻が云うには、今はふつう紅いマニキュアはしない、透明のつや塗りでは。さすれば、清冽の気が漲り、俄然「洗はるる」が面目。戦中派はどうも古くて。)

(出句 一覽掲載順 平26・09・22)

一句鑑賞

筒井筒の恋は古りにし竹の春

幸一

秋茄子のふと違ふ皿に盛る

みち

はじめて秋茄子が食卓に登場する日だ。新しい季節がやつてきた喜びが昨日と違ふ皿を作者に選ばせる。それは訪れた新しい季節に対する挨拶であり、もてなしである。作者のやさしさがにじむ。

がやがて恋を知り歌を交換し合つて結ばれたというのは有名な伊勢物語の一段である。此の句、そんな古物語に託して、過ぎ去つた少年の日の淡い恋情を、盛んな竹の春を前にして懐かしんでいるのだ。「古りにし恋」は遠い昔の恋。懐かしくもあり切なくもある。甘やかな郷愁の漂う句である。

竹の春光源氏が来る気配

啓泰

上代の人々は風のそよぎ、葉ずれの音にカミの訪れを感じて、あるいは歓喜し、あるいは畏れたという。それらはヒトを超えたモノの来臨の前触れであり予兆であつたからである。(たとえばおなじみの歌舞伎の「ヒュードロドロ」なんてのを思い出せばいい)この句はそんな民族の名残を感じさせて面白い。勢いよく伸びた竹の葉擦れに恋人の訪れを感じとつて胸彈ませている王朝女性を想像するのはどうだろう。楽しい想像だ。「写生」といい「客觀」というのが俳句の本道であるにせよ、現実を越えた幻想世界に遊ぶこともまた文芸の本来である。

鯉ゆるく水疲れして夏終る

陽一

一句鑑賞（42号分）

飯田孝三

夏の間元気に泳いでいた鯉もそろそろ疲れが出たせいか秋冷とともにその動きがゆるくなってきた。中七までの物憂げなリズムを「夏終る」という強くきっぱりとした語調で絞めて見事。

白鷺の百羽を連れて稻刈機

高志

落ち穂をついばむためだらう数知れぬ白鷺が稻刈機のあとを追つてひしめきあつてゐる。「百羽を連れて」と稻刈機を主体に据えたことで刈り取り作業の動きが生きた。青い空、黃金色の稻、真つ白な白鷺。印象派の絵を見るような明るい農村風景である。

河童碑にさやぐ百幹竹の春

紀子

河童碑は茨城県牛久に住んで明治期から大正期にかけて活躍した日本画家小川芋錢の記念碑。特に河童を漫画風に描いて人気があった。僕は尋ねたことがないのでわかりかねるけれど周囲を深い竹林が囲んでいるのである。「さやぐ百幹」という中七が深い竹林の風に鳴る音と林立する太く逞しい幹の佇まいを目前に浮び上らせる。

竹の春芋錢旧居の硯箱

多美子

旧居の文台の上に置かれた硯箱であろう。その一点に作者の目が注がれている。一句全体が体言のみで成り立っているために深い静寂感が醸し出されているのが感動的である。

舟底に音蓮の根の育ちをらむ
蓮見吟遊のひと時、舟底のかすかな音にふと耳を澄ます。蓮は、年々花咲き花移り、その間も、水底の泥中深く刻々根を張り、芽を育む。年輪ひそむ心耳にその音が届くのである。ある齡になつて初めて見え、また聞こえてくるものがある。今更、それに気づくのだが、上五、

「に」に、舟底に今し耳を凝らす思いが見てとれるのである。

蒲の穂のまだ硬くしてきりたんぽ

高志

なるほど蒲の穂の形はきりたんぽにそつくり。だからといって、ただの見立ての句ではない。きりたんぽは、ご存知、古くから秋田に伝わる郷土料理。今ではスープ等に並ぶが、かつてはその地の外では食べられなかつた。きっと、学生の頃など若い時分に旅で口にしただろう。そんな日の思い出が俄かに甦る。今はまだ硬い穂もやがて時がくれば弾け、辺りに白い絮を飛ばす。蒲の穂は絮といえば「因幡の白鬼」だが、戦後は国語の教科書にものらない。絵本で読んだか、母さんや家族に聞かせてもらつたに違ひない。父母在りし産土の一齣々々が瞼に浮ぶのである。

あんばんのやうな雲あり終戦日

みち

敗戦は悔しかつたけれど、それは“欲しがりません勝までは”が終つた日。実際、あんばんを口したのはそれから何年ぐらい経つてからだつたろう。掲句、甘味飢えの民の泣き笑いの図が目に浮ぶ。地の悲喜劇を下に、悠然、あんばん雲が空をゆく。それを、‘‘あり」と鮮やかに切り返した器量がまた天晴れ。飘々のユーモアである。「終戦日」の口調のやわらぎがいい、「敗戦日」ではあんばん雲が皺む、民草は萎み放し。蛇足だが、「終戦日」はその当日と年々同日に通じる。なんなん七十年の時をいだいた、ふところ深い一句である。

極楽の端かもしれず蓮の花

敬司

もう十年足らずも早く生まれていたら、兄達のように、大勢、戦塵や海の藻屑と化していたに違いない。昭和一桁はつくづくそう思う。それを免れ、戦後はかつてない経済繁栄に浴し、まづは安穩に過ごしてこられたのは、いまだに地上、水域に紛争・戦闘が絶えぬ人間の歴史上、類見ない僥倖であるといえよう。生きながら極楽の端にいるわけである。先人達の苦労や可惜あたらいのちを散らした数多の兄達の胸中を思うと、なんとも相済まない氣もちがする。そんな読み方もできるだろうか。戦後七年目、八月十五日恒例の蓮見艇上の吟である。

象鼻杯象の鼻ほど高く挙げ

昭七

象がもつとも象らしいのは、長い鼻を掲げる時。天上来大人の座、その妙なる香氣に憧れるのだろうか、それとも、遙かに海をわたつてくる故郷の風に応えるのだろうか。「猪の鼻もありたる象鼻杯」（猪牙）ではさまでらぬ。さあさ象鼻杯、蓮の葉を高々と挙げて、乾杯しよう。カンパーアイ！喝采喝采。二次会の句「転がれる蟬のむくろの静かなる」は、周りが静かだというのではない。声を立てず、身動きもせぬ落蟬のことでもない、落蟬を目で止めた心の裡、肅然たる思いをのべるのだ。奥が深い、内観の句である。「静か」は「しづか」もあるだろう。

(平26・09・03)

一句鑑賞（41号分再録）

増田陽一

短夜の無限にながき介護かな

幸一

「老老介護」の時代とよく言われるけれど、まことに身につまされる句である。「短夜」と「無限」との対照に言葉の冴えがある。技巧だけではない。夜が明けても日が暮れても介護の日々は続く。否、続いて欲しい。そのなかで短夜のすぐ明けることが、少しほつとする慰めとなりそうな感じもある。お互に頑張ろうではないませんか。翻つてぼくはわが身に降りかかった「老人」という役割に狼狽するばかり。

(2014
・ 07
・ 25)

老人

お便り広場（到着順、敬称略）

浮いてくる水すれすれの蛙の目（山田凡二句）

（H／26・8・23 山本百合子）

（浮いてゐる水すれすれの蛙の目（旭登志子）が最近の句にあり、元々 蛙の目越えて漣又さざなみ（川端茅舎）があり、いずれも、茅舎の句の類想でしよう。百合子さん、自句をお寄せ下さい。もしくは、本誌の句をお書き下さい。）

八月号拝受致しました。編集後記にあるやうに句誌になりましたね。私の分は除外した方が良かつたと思います。遠慮なさらずにして下さい。しかし皆様見事ですね。添削の分はたしかにぐーんと佳くなっています。終戦日は私は中学一年、今日からは灯下管制をしないで一晩中あかりがつけられると喜んだ覚えがあります。そして月末に焼跡にバラックを建てそこで住みました。一間の部屋でした。皆様の益々のご健康を祈ります。

（8・25 小山陽也）

蓮見吟行にお招きいただきましてありがとうございました。「白金葭」八月号拝読させていただきました。内容のすばらしさに感激いたしました。沼を船で渡ることも、蓮を手にしたり味わつたり、酒盛りしたりしまして、俳句など全て初体験の雅な一日をありがとうございました。私の句「蓮うき葉水玉うごき空高し」を小金井市の句会

に出句済みです。

（8・26

本山まいこ）

玉誌「白金葭」第42号を有難く拝受。p8の「みんな

んやなぜか生きたし今少し」（幸一）の句が心に沁みます。「熱地獄それでも矢張り今がいい」（由紀夫）とでも書きたいです。地震や水害などがあつても戦中戦後のことと比較すると今は極楽の感強し、と言いたいです。太平洋大戦と比較すると小事細事です。東日本大地震も原発の爆発も比較すると細事も細事。被災者には同情を禁じえませんが・・・。ご健筆を祈念し皆様のご健康をお祈り申しあげます。草々 （H 26・8・25 河村博旨）

やつと涼しくなりましたね。先日は沢山のお野菜をいたきほんとにありがとうございました。丹精こめて作られたと思うとパクパク食したらバチが当りそうですが、そのパク・・でした。白金葭八月号は沢山の方が参加されてますます充実というか句が醸すかほりがしました。うまく云えませんが好きな句をとり出してみました。

蓮見舟天気晴朗なれど波高し

あんばんのやうな雲あり終戦日

風の道葉裏白くし蓮見舟

手賀沼やあやめに替へて蓮の花

大仏のお顔埋まる青葉かな（だだいしょく）景太ぎすまやか！

夏の空昼の金星見てをりぬ

みちさん！ちよつと楽しくなりました。今月の私の句

で、秋雲のひと刷けかかり昼の月 がありました。同じ

感慨にうれしくなりました。

みち様 高志様に宜しくと。とろとろ眠くなりすごい字でごめんなさい。お札のつもりで書いています。読み捨てて下さい。

(8・22 倉田紀子)

御葉書頂きました。御親切にどうもありがとうございました。皆様とはだんだん遠くなる感じです。九月は構造の根本、笹崎、武井さんと会います。二回目です。明るい話題にするつもりです。今はやめていますが、たまたま「日経アーキテクチャ」「科学」等眺めて捨てています。26日ボケの面接がありました。年相応のやうです。来月にわかるやうです。根気がなくなりました。朝夕の雀へのお米やりが日課です。益々御活躍を祈ります。

(8・29 小山陽也)

光成高志・みち様
恒例の蓮見舟吟行に加わられず残念でした。海外小旅行

に出て帰つてみると、広島地方が洪水、山崩れのひどい被害をうけていました連日のテレビ、新聞の情報では、高志・みちさん夫妻のご郷里に災害は及んでいないようですが、如何だったでしょう。さぞ心配されたでしょう。遅ればせ、お見舞い申しあげます。『白金蔵』八月号を頂戴しました。作品、鑑賞の充実ぶりを今さらに諾いました。「編集後記」に全く同感です。

(平26・08・29 飯田孝三)
(右お見舞い文、ありがとうございます。お察しの通り、今回の土砂災害は広島市の山際の宅地造成地を襲つた土石流によるものでして、私らの郷里とは離れています。先の東日本大地震といい今回の土石流災害といい、私の仕事としてきた分野であります、併入生活に入った途端、自然の猛威を受けているようで、先の荒鶲に見られているような心持は依然として残っています。)

右、第42号蓮見舟吟行句の後選鑑賞です。佳句の多い中から五句にかぎつてお届けします。「お便り広場」、「俳窓評論纂」、「我孫子日記」の句にもたいへん惹かれます。漸く秋がきた感じがします。ご精吟のほどを祈りあげます。(平26・09・03 飯田孝三)

よろしくお願ひ申しあげます。いづこより黄金虫入る蓮見舟に共鳴しました。大分朝夕楽になりました。御自愛下さい。光成高志様 (H26・9・14 青木啓泰)
つくつくはダラギンチヨーと言つて止む 啓泰

今月のはじめ家内が脳梗塞で倒れて、ずっと柏総合病院に入院しています。八十二歳の認知症に加えて右半身麻痺、言語障害を伴い、いつ不測の事態がおきても、不思議でなくなりました。それでも見舞いに行くと瞳は私を追うようで、物も何か言いたそで、握った手を握り返そうとするようです。相手が死ぬような病気になつて、はじめて連れ合いがかけがえのない恋の対象だったと気

付く。人間とは（自分とは）何て勝手な存在なんでしょ
う。つかぬ愚痴をのべました。短冊同封しました。間に
合つたらで結構です。皆様によろしく。
高志様

（26・9・16 松村幸一）

受贈誌（九月号）

行滝の岩のむらさき岩煙草（俳四平23四月） 平野ひろし

縁先を蟹の走れり講者宿（〃）

藪蚊打つ雜魚寢の誰の真つ赤な血（〃）

パリ祭わが青春のジヤン・ギヤバン（飛行雲72号） 駿河岳水

徘徊者かもサンダルの老女佇む（〃）

黒南風や七里方浜の白き波（あすか九月号） 山尾かづひろ

窓口にのこる火の香や時鳥（〃） 加茂眞智子

こだま（飛行雲主宰 駿河岳水抽出）

高島屋一本物の鰯壳る（白金霞3月号） 光成高志

俳窓評論纂

*左のような陽一さんの句が主宰によつて鑑賞されまし
た。全文を転載します。

小熊座の好句

訣れ来て蛻蛾のゐる道路鏡

高野ムツオ

増田陽一

「訣」の字の初見は、宮沢賢治の詩「永訣の朝」によ

る。まだ高校生であつた頃だ。似たような漢字に「決」
があり「決別」など別れの意味の言葉としてなじんでい
たから、最初は少し違和感があつた。しかし、「決」は覺
悟する、判断するという意味で、別れという意味は付隨
したものである。白川静の『字統』によれば「夬」は刃
物をもつてものを切断し、えぐりとることを指し、それ
にシつまり川が付き、洪水などで堤防の一部を切り取る
など重大な決断をするということから「決」は決心など
の意味に用いられるようになつたようだ。「訣」は、もの
を分離するに、言葉をもつて行うことである。つまり、
言葉を発して別離するという意味になる。

掲句は相手が死者であるか生者であるか、明言してい
ない。が、私にはどうしても前者に思えてしかたがない。
生者との別れは無言との、たわいないこだわりのせいか
も知れないが、それ以外にも理由がある。それは出会つ
たのが蛻蛾で場所が道路鏡であるからだ。蛻蛾は、別れ
が死者とのものであることを暗示する。蛻蛾は体長3セ
ンチ程度、飛ぶのは主に山間の昼間。だが、近年は住宅
地にもよく現れる。真つ黒な前翅の先端あたりに太い帶
状の白線があり、それらが喪服を連想させる。加えて頭
部が赤く、それで蛻の擬態と言われていることが極めつ
けだろう。名もそれに由来する。和泉式部の歌を引用す
るまでもなく、蛻は人の魂の譬えた。つまり、蛻蛾は永

訣してきただばかりの人の生まれ変わり、いやその擬態と作者には思えたのだ。場所が道路鏡であつたというのも、さらに暗示的。鏡は彼岸此岸の出入り口である。道路もまた彼岸へ続くものであるのは指摘するまでもない。「道路鏡」という無機質な言葉が、詩の言葉として、これほど重みをもつた例を他に知らない。

(馬追や闇の映りし道路鏡

向日葵の突立道路鏡のごと

枯山を吸ひ込むでゐる道路鏡

増田陽一

黒田甫水

伊藤希眸

秋風を映す峠の道路鏡

大串章

など道路鏡を詠つた俳句は少なくない。天狼の句でも今思い出せないが沢山あつた。陽一さんの句は、「蛍蛾のゐる道路鏡」と書いてあるので、道路鏡にとまつてある。映つてあるのなら、「蛍蛾映る道路鏡」と書かれる筈だ。私は、悦子夫人と「ではまたね」とか言つて、訣れ来て道の曲がり角の道路鏡に蛍蛾が止つているのを見つけ、その懐かしさと凸面鏡に映る町並に、今の陽一さんの感慨を蛍蛾に喻えた寓言句だとみました。)

旅のうたを読む

VII

—若山牧水の旅—

武者昭七

幾山川越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく
中学生の頃であつたか初めてこの歌に触れた時の衝撃

を忘れない。生きることは「寂しさ」と分ちがたく結びついていること、寂しさは「生」の宿命であること、言葉にはならなかつたけれど、そんな思いが胸を切なくした。それ以来牧水は僕にとつて離れがたい歌びとなつた。今思えば感傷過多で少々恥ずかしいような歌ではあるが感じやすい少年のこころにはしみじみとしめるものがあつた。

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな
明治四十三年信州小諸城跡での作。かたわらの秋草の花
が私に語りかけてくる、「滅びさつたもののなんと懐か
しいことか」と。この作の背後に芭蕉の夏草の句や藤村
の千曲川旅情のうたがあるであろうことは容易に見て取
れる。ともに滅び去つたものへの手向けの歌であり、そ
の底にぼくらのこころの奥底に宿る遠い先祖からの万象
流転と無常の思いがある。

大正五年三十歳ころから牧水は多く旅に出て、特に各地の川のみなみ(水源)を訪ね歩くことが多くなつた
という。「みなみ」は牧水のいのちの始原であり、そ
こに分け入ることはみずから生命の始原に分け入るこ
とであつた。牧水は次のように書く。「元來私は峡谷の
しかも直ちに渓流に沿うた家に生まれた。そして十歳ま
で在其處で育つた。そんなことのあるためか渓谷といふ
と一体に心を惹かれ易い」

身の故にや時の故にや此頃おほく渓をおもふ

何処いはとはさだかにわかねわが心さびしき時に渓流の見ゆ

渓を思ふは畢竟孤独をおもふ心か

巖が根につくばひをりて聴かまほしおのづからなるその渓の音

「みなかみ」は川のみなかみであると同時に、もっと

本質的な意味で、牧水自身のうちにひそむみなかみであつただろう、とは牧水ファン大岡信の言葉である（「若山牧水」中央文庫）。

（2014・03・15）

フランドルの旅十句（08・16～21）

飯田孝三

フランドルは疾とうに爽やか白い雲
ベニニアの花の絨毯グランバス

（グランバスはブリュッセル旧市街中心の広場。隔年、斎に花を

敷き詰め「花の絨毯」祭が開かれる）

デザートは大きワッフル祭過ぐ

人集だかり分けて馬車来る秋真昼

カリヨン鳴り出づる鐘楼雲は秋

躰る缶にコインを黄葉きばの隈

右三句 ブリュッセル近郊・シント・アナ・ペーデ教会周辺

ブリューゲルの徑に鵠に出喰はさず

シルクハツト廊を徘徊秋日ざし

ゲント・聖ニコラス教会（眼空うな正装の老紳士である）

のんびりと牛が草食む青牧場
ブリュッセル・パリ沿道（牧場は年中青草である）

（平26・08・31）

我孫子日記

8／15 例会。8／24 トライアスロン応援→*三匹獅子舞。
8／27 青戸。8／28 *2 都庁舎の薪能。9／1 病院。9／2
2／3 上田城→鹿沢温泉休暇村。9／4 久寺家中。
9／11 同上。9／12 *4 萱吟行句会（南千住界隈）。9／15
*5 布佐秋祭。9／17 S.O.A. 9／19 例会。

*三匹獅子舞土の舞台に水を打つ

講迎と女獅子が舞へり秋うらら

*2 秋雨の中や高砂妻と観る

尉と姥向き合ひ終る薪能

*3 真田村蕎麦と稻とが隣り合ふ

*4 秋雨の烟るや巨岩群るる森

闕伽桶に秋雨残る延命寺

童胆の供花に香煙可笑塚

身に入むや腑分けせし人されし人

高志 敏子 みち 高志 みち 高志 みち

朋子 一艸人

高志

身に入むや腑分けせし人されし人

「舞」と一字刻みし墓石秋海棠

溝蓄麦を供華に添へたり淨閑寺

*5 山車の裏面を吊つて前で舞ふ

鳳凰の稻穂を衝う神輿ゆく

こい乃

良子

高志

みち

ます。延宝年間の芭蕉の句、当時の江戸の点取俳諧をよく吟味することが、芭蕉の軽みへの出発点と思つていままでのまだまだ草稿を続けます。未掲載の原稿が増えましたら、二十頁に挑戦致します。

編集後記

今日は陽一さん幸一さんことを思いつつ編集を致しました。なぜというに、二両人とも奥様を介護されておられます。そういう境遇をものともせず、自己を冷静に見詰められ、句作され、本誌に投句されて居られます。俳人はかくありたいものと思います。俳句は生活と共にあるものですから、何を作ろうと自由であります。旅吟あり本歌とりのような所謂談林俳句あり、写生句あり、心象句あり、寓言俳句あり、暗喩句あります。私のような不器用なものは専ら季語の世界を広げる写生生活俳句しか出来ませんが、それでも非常に楽しく思います。今日はどういう俳句が出来るか、新しく何を発見で

きるか、誰にお目にかかるかを考えて目覚める時、自然にうれしさが湧上つてまいります。ほんとの人生とはこれなんだとつくづく思います。

そういうことで、ハガキ句報四十三報を掲載するスペースがなくなりました。芭蕉の軽み以後も同じく割愛し

白金葭	第43号	平成26年9月発行
編集・発行人	光成高志 (TEL & FAX	
発行所〒	270-1119 我孫子市南新木2-14-17	
表紙の題字	.. 加納綾女。写真は9月23日の白金葭	
04	-	
7187	-	
1068	(